

■ イベント・レポート ■

「第29回全国きき酒選手権大会」開く

初出場・瀧村健治さん(兵庫県)が「きき酒日本一」の座に
＜団体の部＞は高知県チーム(籠尾・横山さんペア)が制覇



辰馬会長の祝福を受ける個人の部優勝の瀧村さん(右)

高知県チームの籠尾さん(左)と横山さん

第29回「全国きき酒選手権大会」が10月30日の正午から、東京港区のザ・プリンスパークタワー東京で開催され、＜個人の部＞では、全国大会初出場の瀧村健治さん(兵庫県代)が、並みいる強豪を制して、見事きき酒日本一の座を獲得。また、＜団体の部＞では籠尾博章さんと横山知紗さんの高知県チームが、日本酒王国の実力を発揮して、栄冠を手に入れました。



プリンスパークタワー



68人の各県代表がチャンピオンの座をめざして真剣勝負

決着は14人のプレーオフで。女性パワーもますます盛ん

34都道府県の代表68人(男性45人、女性23人)が、「きき酒日本一」の座を賭けて自慢の技を競い合った「第29回全国きき酒選手権大会」。今年も、本戦からプレーオフによる最終決戦へともつれこむ激しい展開となりました。中でも、プレーオフは計14名が参戦するという例年になく大接戦で、参加選手のきき酒レベルの向上はもちろん、30年近い歴史を持つ長寿イベントの存在感を強く印象づけました。



女性パワーの活躍も益々盛ん。惜しくも4年連続のチャンピオン誕生はなかったものの、女性参加者の数は昨年より4名増。プレーオフにも5人の女性が参加して、腕自慢のきき酒ベテランたちと互角の渡り合いを演じました。団体の部上位3チームがすべて男女ペアというのも近年の傾向を反映した結果といえそうです。



また、今大会では、元プロ野球選手の金村義明氏(現野球解説者)



が招待選手として特別参加したほか、会場には衛星放送のスポーツ専門チャンネル「J SPORTS」の取材クルーも入り(レポーターは日本酒スタイリストの島田律子さん)、ビッグイベントにふさわしい華やかな雰囲気盛り上げていました。(競技の様子は「J SPORTS」で12月に放送予定)。

●上位入賞者の方々(敬称略)

<個人の部>

優勝 瀧村健治(兵庫県)
準優勝 穂積秀明(埼玉県)
第三位 籠尾博章(高知県)

<団体の部>

優勝 高知県(籠尾 博章/横山 知紗)
準優勝 長野県(小林 千弘/倉沢 晃子)
第三位 福島県(早川 健児/佐藤 祥子)



「適度な緊張感で一日を楽しんで」(佐浦委員長)

競技に先立って行われた開会式では、まず中央会の佐浦需要開発委員長が主催者挨拶。「このところ女性陣の活躍がめざましいが、今年は男性の巻き返しにも期待したい。優勝、入賞をめざして精進の成果を発揮してほしい」と男性陣の奮起を促した上で、「日本酒は健康にもよく日本文化とのつながりも深い。そんな日本酒のおいしさ、奥深さを、今日一日適度な緊張感を持って楽しんでください」と呼びかけました。



主催者挨拶を行う佐浦委員長

奈良県チームの選手宣誓で競技スタート



奈良県チームの2人が選手宣誓

続いて、昨年団体の部を制覇した山口県チームによる優勝旗の返還が行われた後、同じく昨年準優勝の奈良県チーム（畑純平さんと岸仲順子さん）が「日ごろの鍛錬の成果を発揮し、正々堂々と競技することを誓います」と力強く選手宣誓。高橋競技委員長から競技方法の説明を受けた後、いよいよ熱戦の幕が切って落とされました。

ハイレベルな問題に「難しかった」の声続出

まずは、酒造の基礎知識や歴史などの設問 20 題に答える筆記試験（20 分）を行った後、4つのグループに分かれ、さき酒本戦のスタート。競技内容は、これまでどおり 7 種類の日本酒のマッチングで、1 グループ 20 分の持ち時間。参加者たちは、プレイオフも含めて、およそ 2 時間にわたって緊迫感みなぎる闘いを繰り広げました。



筆記試験の様



「どうでした?」「いやぁ、どうも…」

競技を終えて控え室に戻った参加者からは、「難しかった」という声が続出。県の予選と比べて酒質の見分けにくさ、競技時間の少なさなどに戸惑った人が多かったようで、中には「ピンチです。酒質も色も見分けが付かない。恐ろしい結果になりそう」「プレッシャーで頭が真っ白になった。全国大会には 10 年前にも参加したが、ずいぶんレベルが上がっている」という人も。参加者は、隣同士や他県の代表と答えを確かめ合ったりして、結果発表までのひと時を過ごしていました。

互いの健闘を讃えて懇親のひと時

競技終了後に開かれた懇親会では、辰馬会長の発声で全員そろって「日本酒で乾杯！」の杯を挙げた後、正解発表と表彰式が行われました。審査委員長を務めた独立行政法人酒類総合研究所の木崎康造理事の講評に続いて、入賞者の名前が次々に読み上げられると、会場のあちこちから大きな拍手と歓声が一。



酒類総研の木崎理事

辰馬会長から賞状、賞品（日本酒と全農提供のお米券）などを手渡された各部門の入賞者は、マスコミの求めに応じて記念写真に納まったり、随伴の県組合関係者らと喜びを分かち合ったりして、懇談ひと時を楽しんでいました。



窓外に都心の街並みを望む絶景の中で懇親のひととき



辰馬会長の発声で「日本酒で乾杯！」

「大手を振って家に帰れる」優勝者よろこびの声

日本酒の清澄剤となる柿渋メーカーに務める瀧村さんは、「紛れもない日本酒応援団の一人ですが、何しろ初参加なので優勝なんてとても信じられない」と謙遜しながらも、「特訓に付き合ってくれた妻から『優勝しなかったら帰って来なくていい』と言われて家を出てきました。これで大手を振って帰ることができるのがいちばんうれしい」と破顔一笑。

一方、団体の部で優勝した高知県チームのお2人は、「全国大会はこれで4回目。ここ3年は連続で参加しているが、これまではまったく振るわなかった。悔しくて悔しくて、ひたすら飲み続けて訓練を積んだおかげで、やっと名誉挽回できました」（籠尾さん）



「来年のNHKの大河ドラマは坂本竜馬。優勝は思いがけなかったけれど、このおかげで、もしかすると主演の福山雅治さんとお酒が飲めるかも。とにかく皆さん、もっともっと高知に遊びに来て高知のお酒を飲んでください」（横山さん）と、土佐人らしい晴やかな笑顔で、それぞれ優勝の喜びを表現してくれました。